

ながく ぼ せき すい 長久保赤水

初の本格的な日本地図を制作した学者 高萩市



(個人蔵)

享保2年(1717) - 享和元年(1801)。多賀郡赤浜村〔高萩市〕生まれ。本名は玄珠。農業のかたわら学問に精進し、享保17年(1732)頃、下手綱村〔高萩市〕の郷医鈴木玄淳に学び、さらに寛保元年(1741)、水戸藩の学者、名越南溪に師事する。明和5年(1768)に学問の功により、水戸藩の郷土格に取り立てられる。安永4年(1775)、緯線と方角線を記入した最初の日本地図である「改正日本輿地路程全図」を完成する(安永8年付刊行)。安永6年(1777)には水戸藩第6代藩主徳川治保の侍講となり、江戸常勤の身となる。『農民疾苦』を著して治保に農民の実情を進言するなど、農民の立場から藩政のあり方を考えることに努める。

長久保赤水は、多賀郡赤浜村〔高萩市〕で代々庄屋<村長>を務める旧家に生まれました。幼くして母親と父親を続けて亡くしましたが、継母が深い愛情を注いで赤水を育ててくれました。幼い頃から勉強が好きで、近所の海岸で砂に文字を書いて練習していたほどだったといいます。親戚や村の人から「農業をするのに学問はいらない。農民は農業だけやっていればいいんだ。」という反対の声もありましたが、継母は「人は、本来の仕事のほかに、楽しんで習うものがあると豊かな人生が過ごせますよ。」と言って、いつも赤水をかばったといわれています。赤水が学問を熱心に続け、農業と両立させていけたのは、やさしい継母の教えが身についていたからなのでしょう。

赤水は、はじめ、下手綱村〔高萩市〕の医者であり漢学者でもあった鈴木玄淳の私塾で学び、後に水戸藩の学者であった名越南溪に入門し、儒学・歴史・文学・漢詩などを勉強しました。

熱心に学問に取り組んだ赤水は、学問を通じて様々な人たちとの交流を深めていきました。なかでも松岡地方〔日上市・高萩市・北茨城市周辺〕において、師の鈴木玄淳を中心にむすびついた7人の友、いわゆる「松岡七友」との交流は赤水にとってかけがえのないものでした。

赤水は、見聞を広めるため、農作業が楽になる時期を利用して旅にも出かけました。赤水は、旅で見聞きしたこと、調べたことを記録に残しており、奥州・北陸地方の旅行をまとめた『東奥紀行』や、安南国〔ベトナム〕から帰国した磯原村の漂流民を、磯原村庄屋代理として、長崎に迎えにいったときのことをまとめた『長崎行役日記』など、後に著作として刊行されたものもありました。特にこの長崎訪問は、赤水にとって大いに見聞を広げ、知識を得ることができた旅



「改正日本輿地路程全図」(長久保赤水顕彰会蔵)

であったようです。

明和5年(1768)、これまでの学問の功を認められ、水戸藩の郷士<農村に住みながら、武士と同じ身分を与えられた者>に取り立てられました。その後もそれまで以上に学問に励み、農政や地理学などに関する多くの本を著しています。中でも、安永4年(1775)に完成し、安永8年付けで刊行された「改正日本輿地路程全図」は、緯度を示す緯線(よこ線)と、現在の経度ほどの明確な基準に基づいてはいませんが、方位を示す方角線(たて線)が引かれている日本最初の本格的な地図として有名です。全国各地の地理に関する書物や地図を集めたり、時には街道を行き来する旅人から話を聞いたりして情報を集め、20年以上かけて完成させました。「自分が学んだ知識を世の人のために役立てたい。」という赤水の思いが込められたこの地図は、その願いの通り長く人々に愛用され、明治4年(1871)にいたるまで約100年にもわたり出版され続けたのです。

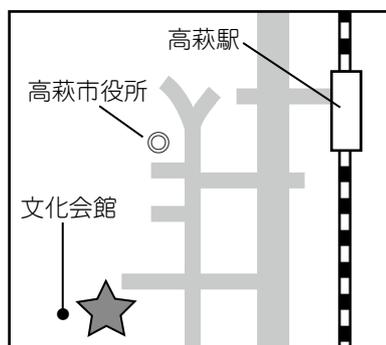
赤水は、安永6年(1777)、61歳の時、水戸藩第6代藩主徳川治保の侍講<直接勉強を教える役目>に選ばれ、小石川の江戸藩邸に住むようになりました。赤水は農民の苦しい生活の実情を明らかにした『農民疾苦』を著すなど、農政学者の立場から、農民のための政治のあり方を藩主治保に説き続けました。農業と学問を両立させてきた赤水だからこそ、治保からもたいへん信頼され、その考えは大いに藩政に取り入れられたのです。地理学者、そして農政学者として多くの業績を残した赤水は、享和元年(1801)、郷里の赤浜村で85歳の生涯を閉じました。

ゆがりのスポットに行ってみよう

高萩市歴史民俗資料館

所在地 高萩市高萩8-1

内容 この資料館には、長久保赤水に関する資料などが展示され、その業績を紹介しています。



おもな 参考文献

『水戸の先達』(水戸市教育委員会・2000)

『郷土の先人に学ぶ』(茨城県教育委員会・1986)